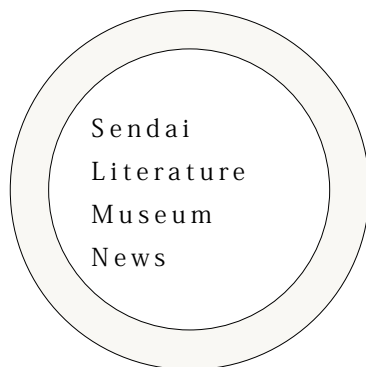


仙台

文学館

ニュース



第四十四号

エッセイ あかまつの道を抜けて

第6回 —— 「花の林」

佐伯一麦

まだ寒が勝っているが、樹木の芽吹きを見れば、確実に春に向かっていくのがわかる。

桜の樹に近づいてよく見ると、枝先には、まだ固く小さいが、赤紅色をした芽が出ている。桜は花の頃もよいけれど、芽吹きするときも味わいがある。枝の表面も紅がかって見える。草木染をする連れ合いに聞くと、桜からは赤みがかった茶色が染まるという。桜が樹内にたくわえているその色素が目に見れているのが、今なのかもしれない。

この時季、雑木林に付けられた「あかまつの道」を歩くと、三年前の二月に亡くなった先輩作家の古井由吉さんのことが思い出される。コロナ禍の中での逝去とあって、いまだにお別れの会なども開かれないままとなっている。

二十二歳年長の古井さんが、ちょうどいまの私の年回りだったときに、往復書簡を交わした。私が北欧のオスロに一年間滞在することになり、「隠遁者とまでは言わないが、言語上の孤立に追い込まれることは必至だから、往復書簡をやりましょう」と提案されたのがきっかけだった。

異国に暮らす身にとって、古井さんから届く達意の日本語の手紙は、隠遁者の元へカラスが届けて恵んでくれるという、わずかな食糧のように貴重なものとなった。そのなかで、二月九日の日付のあるこんな文面の手紙を受け取った。〈春がもう近くなりました。柔らかな夕映えに照らされた枯木の林を眺めると、林の全体が桜色に染まっています。ほんのりと咲きひろがっている。早くも花の林です〉

前便で私は、インフルエンザが流行する極寒のノルウェーで耳にした、北極海に浮かぶ島の墓地の永久凍土から、スペイン風邪のウイルスのサンプルを採集しよう、という科学者たちの計画を話題にしていた。それを受けて古井さんは、その科学者たちの試みは、危機を予感した衝動であり、過去の厄災に触れて、心身の免疫力を更新しようとする、個人も超える情熱の促しだろう、と解したあと、おもむろに枯木の林へと目を転じたのだった。

今年は、そんな花の林が、目にいつそう映るようだ。

(さえきかずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

CONTENTS

- エッセイ
「あかまつの道を抜けて」 佐伯一麦 ……1
- シリーズ
「私の一冊」くどうれいん ……2
- 特集
「佐伯一麦 北根ダイアログ2022」抄録 ……4
- 予告
2023年度 展示のご案内 ……7
- 文学館日誌 ……8



写真:佐々木隆二



版画：明才

くどうれいん

神沢利子…作 堀内誠一…絵
『ふらいばんじいさん』

いわゆる「こども向け」の作品を書く機会をいただくようになってから、一体何をもって「こども向け」なのだろうと思うことが増えた。高校生として文芸部で児童文学部門の作品を書いていた時のわたしは「こども向け」のことを「かわいらしい挿絵で、ひらがなが多くて、やさしくて、あたたかい物語」のことだと思っていたのだなあ、と、その頃の作品を読み返すと感じる。しかしいま、改めて三歳や小学校低学年に対して自分が何か物語を作ろうと思うとき、そういうものはすべて偽物であり、自己満足であり、言ってしまう「大人用の『こども向け』」だと思ってしまうようになってきた。そもそも、三歳も小学校低学年も「こども」ではなく「三歳や小学校低学年の『ひと』」なのだ。あるいはわたしたちが「二十

の光でますます黒くなる。ああ、なんて自由なことだろう。いつだって太陽に話しかけていいんだ。神沢利子さんのあとがきを読むと、旅先の小さな島で一本のフライパンが鳥のたまごを抱えていて、それを見て「ふらいばんじ

代後半や五十年代前半の『こどもだったひと』なのである。うっかりするとすぐ親が褒めてくれそうな、優等生な子が育ちそうな物語を書きそうになってしまうが、それらは大抵本当におもしろくもなんともない。わたしはしばらく、絵本や児童文学における主人公は読んでくれた子のお手本になるような存在でなければいけないと思っていた。しかし、名作に触れると、自分がいかに甘えたことを考えていたのか思知らされる。「こども向け」とされる名作たちは、もともとんでもなく自由で、やりたいほうでいい、最高にきもちよく、かつこいいののだ。

いさん！」と思いついたのだと書かれていて、わたしはついにはたばた涙をこぼした。こんなのにのびのびとした物語が実生活からひらめいたものだという事実がともうれしかったのだ。わたしは当初こどものために「か

きないのだった。いくつか参考になる作品を読ませていただけてませんか、とお願ひして担当さんが送ってくださいだったので、角野榮子さんの「りんごちゃん」シリーズと神沢利子さんの『ふらいばんじいさん』だった。夢中で読んだ。わあ、と声が出たり、くちびるをむつと結んで涙を堪えたりしながら、導かれるようにページをめくる手が止まらなかつた。そうか、と思った。主人公はお手本でも優等生でもなくていい。読者たちが「おいおい！」とか「やめておいたほうがいいんじゃないの？」とか「そんなあ！」とか言いながら、ばかにしたり、頭を抱えたり、はらはらしたりして見守ることができるとのおもしろいのだ。最初はうんざりするほどわがままに見える主人公の自由さに、こちらもだんだんこの世に無理なことなんてひとつもないんだと思えるほどすすきりのびのびとしたきもちになってくる。

とくに『ふらいばんじいさん』には感動した。めだまやきを焼かせてもえなくなつたふらいばんじいさんは旅をする。ひょうやらくだやさかなと会話をしながら、まためだまやきを焼くために放浪するのだ。最初はあは、と思ひながら読んでいたわたしは、ふ

わいらしい挿絵で、ひらがなが多くて、やさしくて、あたたかい物語」を書くことが正統派で手堅いとすら思っていた。しかしそれはまったく違つた。「こども向け」を書くとは、自分が人生において、あるいは「ひと」として生きていてどんなことがたのしいと思うか、どんなことが起きたらすばらしいと思うか、その想像合戦だ。ぬいぐるみがしゃべりだしたつていいし、すいかの家を覆いつくすほど育つたつていいし、ふらいばんがじぶんの足で家を出て行ったつて良い。ただ読者として触れるだけでは一見ため息をつくほどくだらない「やりたいほう

らいばんじいさんが海にゆられながら太陽に向かって話しかけるシーンで手が止まった。

「ああ、おひさん。わしは あんたが すきだ。あんたは、きんいろにかがやく、せかいいち すばらしいめだまやきさ。」

じいさんは ひに やけて、ますます くるくく なりました。

太陽に向かってこんなにもまつすぐに、しかし対等に、こんなせりふが言えるだろうか。そのままでも黒いふらいばんじいさんが、その「おひさん」

だい」が、書くこうとしてみるとどれだけ難しいことか！ これはどうだ、これでどうだ、と思ひながら書くわたしにふらいばんじいさんが「ふーむ、すいぶんとお行儀のいい『自由だこと！』」と言うのが聞こえてきそうだ。顔を上げるとふらいばんじいさんはわたしのずつと上を飛んでいる。十年、五十年、百年と残る「こども向け」の作品を書く日まで、わたしはもつとたましいを自由に、何にでも足を止めてしげしげと眺めて、ときどき指先でつついたりしながら、やりたいほうでいい生きてみようと思う。



©下平桃子

くどうれいん

作家。「工藤玲音」名義で短歌・俳句も創作。1994年、岩手県生まれ。大学時代を仙台で過ごす。著書にエッセイ集『わたしを空腹にしないほうがいい』『うたうおばけ』『虎のたましい人魚の涙』、歌集『水中で口笛』、創作童話『プンスカジャム』、絵本『あんまりすてきだったから』。初の中編小説『氷柱の声』が第165回芥川賞候補作となる。現在、『群像』でエッセイ「日目は目分量」を連載中。



神沢利子：作
堀内誠一：絵
『ふらいばんじいさん』
(初版1969年 あかね書房)

佐伯一麦

北根ダイアローグ二〇二二

「樹」をめぐるって (抄録)

当館館長の佐伯一麦が、各分野で活躍している方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアローグ」。第三回目となる二〇二二年度は、東北大学農学部名誉教授の清和研二さんをゲストに迎えました。研究者として樹木を見つめ続け、味わい深い文章の書き手でもある清和さんとの対談の一部をお楽しみください。

6 ページ写真・佐々木隆二

◆「樹」と「木」

佐伯 仙台文学館のエッセイ講座でもよく言っていることですが、文学は他者に対する想像力が大事です。清和先生の『樹は語る』という本を読むと、先生が樹木の気持ちを代弁してくださっているようで、清和先生はまさに他者に対する想像力をお持ちだと感じます。

先生の本では「樹木」の「樹」のほうを「き」と読ませていますね。漢字の成り立ちから言うと、「樹木」

の「木」のほうは主に幹と枝のみを指すようですが、「樹」は根っこを生やして地面から出ている植物を指すそうです。先生も、やはりそういった意味合いがあつて「樹」という字を使っているのでしょうか。

清和 漢字の成り立ちは今初めて知りました。「木」だと「木材」といった切られた後の板みたいな感じがします。「樹」のほうが「木」よりも字面が複雑で、ハルニレの巨木の枝ぶりみたいでいいかなと思って。**佐伯** やはり生きている樹木を相手

にする仕事だと、「樹」のほうがふさわしいのかなと思いました。先ほど対談開始前に二人で近隣の台原森林公園を歩きましたが、どんな印象を受けましたか。

清和 人の生活のにおいのする林だなあと。入口にはコナラが多く、昔は薪に使ったり炭を焼いたりしていたんだと思います。それからサクラ、カエデ、ホオノキ、アカマツ、スギ、ヒノキ、モミなどがありましたね。広葉樹がどんどん衰退し、その代わりにスギ、ヒノキ、モミなどの針葉

樹が大きくなっているようです。したがって常緑の葉っぱで真っ暗な森になっていくような気がします。

三重県の伊勢神宮なんかでは、遷宮に備えて近くにヒノキばかり植えていたんですが、一部のヒノキを伐採して広葉樹も植えるようにしたら、非常に綺麗な景観になりました。野生動物や鳥も戻ってきました。この辺も、スギなどを少し伐つて、広葉樹と混ざった綺麗な景観の森を市民の手で作ればいいなと思いました。

佐伯 スギは人工林として戦後にほとんど植えられて、花粉症の原因になったりとかいろいろ言われているけども、全部切っちゃえばいいということじゃないんですね。

清和 ドイツには「森林美学」という分野があります。森林を作る時は、木材生産だけではなくて、美意識に訴えるような景観の森を作るんだと。その原点はゲートで、森林学の中で



文学館から台原森林公園に続く「あかまつの道」を散歩する清和氏と佐伯館長

ゲートを学ぶということもあるみたいです。

佐伯 なるほど。森というのはドイツの精神性を象徴するものだとよく言われていますね。

◆自然へ興味を持ったきっかけ

佐伯 先生が自然や樹木に興味を持ったきっかけは何だったんでしょうか。

清和 小さい頃は近くの川で魚を捕ったり、山で栗や山菜を採ったりしていたんですが、中学生くらいに、国の土地基盤整備事業で、川はコンクリートのまっすぐな水路に、山はブルドーザーで平らにされて田んぼになったんです。生きている世界が一変した感じがしました。なんでもこんなに世の中変わったのかなと、こんなに急激に変えて何をしただすのかなと思いましたね。当時は高度経

済成長の時代で、公害など、地球環境がまずくなってきたりしているじゃないかと言われていました。どうにかしなくてはいいかなあと。工学的な環境改善じゃなくて、もっと生物学的な、生命現象の研究を通じて何かできないものかなという漠然とした思いはありました。

佐伯 自然に対して無知であることはよくないと感じたんですね。じゃあ、その時点ではまだ、樹木への興味というのは芽生えていないですか。専門的に樹木に対して関心を持つようになったのは、北大に進まれて、そこで勉強するようになってからでしょうかね。

清和 そうですね。ただ昔から身近に巨木がいくつもあつて、巨木の下はなんとなく安心できる場所でした。高校時代には、太くてでかい樹を見てみたいという気持ちが一番大き

くて、北海道には太い樹があるんじゃないかと思って北大に進みましたね。

◆「ジャンゼン・コンネル仮説」と「森の珊瑚」

清和 家にミズキの樹を植えているんですが、実が熟すと鳥が食べに来るんです。ミズキの実つてブドウのように中身がジュシーで、どうしてこんなに実にコストをかけているのか、どうしてこんなに鳥に実を食べ

てもらおうとしているのかと思っていました。調べてみると、ミズキの実には親木の近くに落ちた場合ネズミの食害や病原菌で種子や実生が全部死んでしまい、親木から離れた場所に落ちた実から発芽した芽生えだけが大きく育っていました。そうすると親と子供は離れて分布するようになり、その間に他の樹種の子供が入り

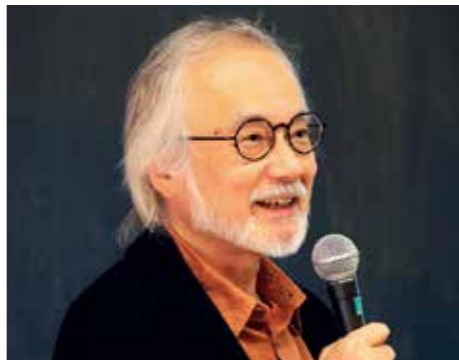
込んでいきます。つまり、狭い空間で複数の樹種が混じり合うようになります。これが森の中で多くの樹種で見られると種が多様な森が創られます。ミズキを見て、「ジャンゼン・コンネル仮説」を思い出しました。どのようにして森の中で種多様性が作られるのか、といった熱帯雨林で見出された仮説です。仙台あたりの温帯林ではこの仮説は成立しないと言われていたんですが、ミズキを見て、似たようなケースを発見したのが非常に面白かったですね。ミズキの樹は自分の子どもが生き残るように、鳥に実を食べてもらって、種子をより遠くへ運んでもらおうとするんですね。温帯の森の中の樹の半分ぐらいはこういった振る舞いをします。

佐伯 「ジャンゼン・コンネル仮説」は先生の研究分野の専門用語ですね。先生の本では、こういった専門用語がある一方で、ミズキの果軸を「森の珊瑚」、ミズキの花を白い花が雲のように見ると詩的な表現もしていますね。

清和 科学論文にはそんなこと書けないですからね。こういう本を書く時には、ちよつと科学論文の気分から外れて自由に書くというか、箍(たが)が外れるというか。(笑)



清和研二（せいわけんじ）
1954年山形県生まれ。北海道大学農学部卒業。東北大学大学院農学研究科教授を経て、現在同名誉教授。著書に「樹は語る」「樹と暮らす」「樹に聴く」など。



佐伯一麦（さえきかずみ）
1959年仙台市生まれ。作家、仙台文学館館長。著書に「鉄塔家族」「ノルゲ」「選れぬ家」「渡良瀬」「山海記」「アスベスト」「Nさんの机」など。

吹きを楽しみにしているんだけど、最近の護岸工事でほとんどヤナギが無くなっていくので、ちよつと寂しいなという気がしています。

清和 ヤナギにはオスとメスがあって、種類によっては、メスは川のすぐ近くに住みます。メスは種子を作るために水分や養分が豊富な河岸を好むと言われています。護岸工事をすると川近くのメスだけが削られてしまう。川から少し離れたオスだけが生き残るけど、オスだけでは種子を作れないからどうしようもない。河川工事をやる人はこういうヤナギの生態も知らないんじゃないかなと思います。こういふことを伝えるには科学論文をどれだけ書いてもダメなんですね。役所の会議でも「はいはい」って言われるだけです。だからここでも訴えたいと思います。

一回やってみたらいいですよ。
佐伯 ここにいる皆さんも機会があればやってみてください。(笑)

すね。クマが狂暴だと思ったことはあまり無いです。あとは森の中を歩いていたら、大きなサクラの樹から、クマがドスンと落ちてきてびっくりしました。でかいんですよ、こんなでかいクマ見たことないなと思うくらいでかくて。だけどクマは臆病なので、振り向きもしないで逃げていきましたね。

◆おわりに

佐伯 「ジャンゼン・コンネル仮説」と『森の珊瑚』が一冊の本の中で共存しているところが、清和先生の本の持ち味でもあるし、読んでいても面白いところでした。

◆ヤナギの生態

あとヤナギの種子って面白くて。ヤナギの種子を観察しようと思って机の上に置いておくと、乾燥したらみるみるうちに外側の皮が外れて膨らんできて、中から毛がビュッと出てくる。毛が出てきた次の瞬間パーンと弾けて空中を漂い始めるんです。この瞬間は面白いものですね。

前にクマが立ち上がって、手を挙げてグアーツと大きな声で鳴いたんです。こつちもびっくりしたから、咄嗟に立ち上がって、一緒にグアーツと言いました。そうしたら逃げたんです。若い綺麗な母クマでした。でも近くに子グマがいて、すぐ戻ってきて、今度は、我々に向かって走ってきました。これは危ないと思って私は樹の裏に隠れたんですが、一緒にいた学生のひとりも逃げたので追いかけてしまいました。クマはすぐに追いかけるのをやめて、子グマを連れて帰っていききました。子グマの近くにいた人間を追い払っただけなんです。あまりおっかない顔はしていませんでした。

◆おわりに
佐伯 清和先生の本『樹は語る』の中に「知らないことの無慈悲さ」という表現がありますね。知らなければ無慈悲に樹木を伐採できてしまうけれども、知ってしまうとそういうことはできなくなると思います。「成熟した森における樹々の日々の生活をよく知ることが、ひいては森を再生し樹々の命に敬意を払うことに繋がる」という言葉も、それがひいては我々の日々の生活にもつながっていくのではないかと思います。多様性ある樹木たちの日常に、少しばかり触れることができたんじゃないかと思えます。今日は本当にありがとうございました。

（2022年11月3日開催）

予告

二〇二三年度 展示のご案内

2023年

4月29日(土・祝)～6月11日(日)

特別展

「いわさきちひろの世界」

ピエゾグラフィ展

没後49年を経た現在も、あたたかな画風で広く愛される画家・いわさきちひろ（1918～1974）。その作品世界をピエゾグラフィ（原画のデジタル情報をもとに制作した精巧な再現）でたどるとともに、ちひろの愛用の品々、エッセイの文章なども紹介します。



「緑の風のなかの少女」1972年



自宅にて 1973年4月



ちひろ愛用のワンピース

2023年度も多彩な企画展・特別展を予定しています。みなさまお誘いあわせのうえ、ご来場ください！

2023年7月15日(土)～9月10日(日)

第23回 こども文学館えほんのひろば

「ささめやゆき物語」

ときにユーモラスに、ときに切なさを感じさせる作品を手がける画家・絵本作家のささめやゆき。『ガドルフの百合』など絵本の原画を中心に、様々な表情を持つ作品を紹介します。夏休み期間中は、読み聞かせなどの「お話し会」や、絵本や児童書を自由に読める「絵本の部屋」も設けます。

2023年10月7日(土)～12月17日(日)

企画展

「石川裕人の世界(仮称)」

仙台を拠点に、劇作家・演出家・劇団主宰として活躍した石川裕人（1953～2012）。その演劇世界を、台本や実際に使われた舞台セット、関係者たちの思い出などによってたどります。



2024年1月10日(水)～2月12日(月・祝)

新春ロビー展

「100万人の年賀状展」

22回目となる新春恒例の年賀状展。テーマ部門と自由部門で、みなさんから寄せられた個性あふれる年賀状を展示します。



前回の年賀状展

2024年1月20日(土)～3月17日(日)

企画展

「文学の記憶(仮称)」

明治から昭和にかけて宮城・仙台で起こった文学的な出来事を、出版された文芸誌や、そこに集った文学者の書簡、宮城・仙台が舞台となった作品など、当館の所蔵資料を中心にしながら、当時の写真や地図なども用いてご紹介します。

新型コロナウイルス感染症の状況により、展示の予定・内容が変更になる場合があります。

「仙台文学館友の会」は、文学に関心のある方々が相互に親睦を深め、仙台文学館と連携しながら事業を支援していく団体です。会報・行事(読書会など)のお知らせを受け取ることができるほか、展示を会員料金で観覧できる特典もあります！ みなさまのご入会をお待ちしております。

*会費(4月1日から翌年3月31日まで) 2,500円
*入会申し込みは、仙台文学館のレファレンスカウンターでできます。(郵便振込でも受付)
～詳しくはお問い合わせください～

「仙台文学館友の会」
会員募集中!

2022年8月～2023年2月



①笑顔の山内ジョージさんと、さとう宗幸さん。



②佐藤さんに「私の一冊」をご寄稿いただいた本紙42号も紹介しました。



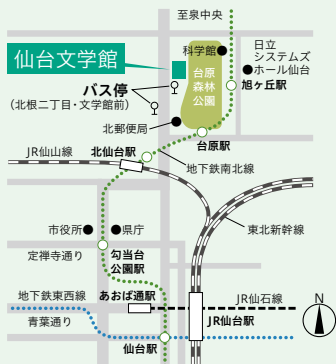
③1時間半があっという間のトークイベントでした。



④岩野泡鳴は今年生誕150年。東北学院に入学し、仙台で3年を過ごしました。

- 12月 11日 特別展「山内ジョージ 文字絵の世界」会期終了。
13日 外看板と館内のバナーを写真展「仙台コレクション2001-2022」に掛け替え。
17日～27日 仙台市名誉市民の洋画家・杉村惇の作品展「画室の韻律」を3階企画展示室で開催。
22日 正面玄関前に毎年恒例の「伝統門松」を設置。
- 1月 11日 21回目となる新春ロビー展「100万人の年賀状展」オープン(2月12日まで)。
19日 第168回芥川賞に佐藤厚志さん(仙台在住)の「荒地の家族」が決定。それを受け、翌20日から2階フロアに特設コーナーを設置。〈写真②〉
21日 写真展「仙台コレクション2001-2022」オープン(3月21日まで)。展示初日にあわせ、トークイベント「仙台コレクションを語る」を開催。写真評論家の飯沢耕太郎さんが聞き手となり、メンバーにお話をうかがった。〈写真③〉
- 2月 9日 常設展示室の特集コーナーを「生誕150年 岩野泡鳴」に展示替え。〈写真④〉
11日 前日からの大雪のため午前中臨時休館。
18日 写真展「仙台コレクション2001-2022」関連イベント、「大判カメラで文学館を撮影してみよう」を開催。
23日 写真展関連イベントとして、俳優の前田有作さんによる朗読「仙台をよむ」を開催。

- 8月 6日 「こども文学館えほんのひろば 忍ペンまん丸展」関連イベント「おり紙の術をマスター!? ちょい難おり紙教室」を開催。講師は東北大学折り紙サークルORUXE(オルゼ)の皆さん。
24日～30日 博物館実習を実施(4大学から5名の学生が参加)。
下旬 夏の甲子園での仙台育英学園高校の優勝を記念し、常設展示室の井上ひさしコーナーに野球に関連する資料を展示。
- 9月 11日 「こども文学館えほんのひろば 忍ペンまん丸展」会期終了。
13日 外看板と館内のバナーを特別展「山内ジョージ 文字絵の世界」に掛け替え。
- 10月 1日 特別展「山内ジョージ 文字絵の世界」オープン(12月11日まで)。
16日 小・中学生の詩作品を対象にした「第63回晩翠わかば賞・晩翠あおば賞」の贈呈式を挙行。
22日 晩翠忌(10月19日は詩人・土井晩翠の命日)イベントとして、朗読と音楽の調べ「没後70年 土井晩翠作品を味わう」を開催。朗読は俳優の茅根利安さん、箏の演奏は橘寿好さん。
28日 「山内ジョージ 文字絵の世界」関連企画として、仙台市立北仙台中学校の生徒のみなさんによる文字絵展を開催(11月23日まで)。
- 11月 3日 トークイベント「北根ダイアログ」を開催。ゲストは東北大学名誉教授・清和研二さん(本紙4～6ページ)。
8日～10日、15日～17日 仙台市内の中学校2校の生徒が当館で職場体験を実施。
20日 「山内ジョージ 文字絵の世界」関連イベントとして対談「ふるさとの話をしよう」を開催。出演は山内ジョージさんとシンガーソングライターのさとう宗幸さん。〈写真①〉
26日 「山内ジョージ 文字絵の世界」関連イベント、朗読「若きマンガ家たちの青春」を開催。出演は俳優の芝原弘さん。



交通のご案内

■バス利用の場合

〈宮城交通バス〉

- 仙台駅西口バスプール2～4番乗り場
仙台北・泉地区方面行
(北山トンネル経由を除く)

〈市営バス〉

- 仙台駅西口バスプール4番乗り場
(2023年4月1日から6番乗り場)
八乙女駅行

※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

- 地下鉄南北線「台原駅」下車、
南1番出口より徒歩約25分
(台原森林公園内あかまつの道経由)
※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

- 台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひさしの杜

お食事、デザート、各種飲み物などをご用意しています。
お得なランチメニューもあります♪

〔営業時間〕
10:00～16:00(ラストオーダー15:50)
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

